

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：35407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00653

研究課題名(和文) 中世における漢字表記文及び片仮名表記文の表記体混淆文についての基礎的研究

研究課題名(英文) A Basic Study of the Mixed Writing Style of Kanji and Katakana in the Middle Ages

研究代表者

橋村 勝明 (HASHIMURA, Katsuaki)

広島文教大学・教育学部・教授

研究者番号：30330674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：中世にはひとつの文章に漢字表記文と漢字片仮名交じり表記文とが共存している資料が存する。そのような資料を表記体混淆文と捉え、その研究上の意義について指摘した。その上で、研究の基礎データとなる国立公文書館蔵『聖徳太子伝宝物集』の本文テキストデータを作成しWeb上に公開した。漢字の用法については中世の時代を反映した特徴的なものがみられ、その限りにおいては漢字表記文と漢字片仮名交じり表記文との質的な差は見られないことが確認できた。片仮名については、文字の大小においては院政鎌倉期の漢字片仮名交じり表記文と同質であり、表記体が混淆することの影響を受けないということを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、漢字表記文と漢字片仮名交じり表記文とが一資料内に共存している資料について、それぞれの日本語学的特質及び相互の表記体が文体に与える影響について明らかにしようとしたものである。これまでは一資料内に表記体の異なる文が存在している場合、漢字表記文あるいは漢字片仮名交じり表記文として扱うか、あるいは表記上、文体上の特質を論じるには扱いにくいものとされてきた。本研究ではこのような表記体が混淆する資料の特質を明らかにすることによって、日本語史の資料として適切な取扱いが可能となると考える。

研究成果の概要(英文)：In this study, documents dating back to the medieval period that employ a combination of kanji, mixed kanji, and katakana within a single text are examined. This style of writing, commonly referred to as 'mixed-script writing,' holds significant importance for research. The foundation for this research is established through the creation and online publication of data extracted from the 'Shotokutaishiden Hobutsusyu,' housed in the National Archives of Japan. The author's analysis confirms that the use of kanji during the medieval period exhibits characteristic features, showing no qualitative difference between kanji-only and kanji-katakana mixed texts. Additionally, it finds that katakana usage, in terms of character size, is consistent with that of kanji-katakana mixed texts from the Insei (late Heian) and Kamakura periods, and is unaffected by the mixing of writing styles.

研究分野：日本語学

キーワード：表記体混淆文 変体漢文 漢字片仮名交じり文

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中世における一資料中にみられる漢字表記文と漢字片仮名交じり表記文との混淆現象を、日本語学上の質的な問題と捉え、文体との関係を解明しようとするものである。中世には漢字表記文と漢字片仮名交じり文とが同一資料内に共存する混淆文がみられる。このような資料を本研究では「表記体混淆文」と称し、表記体混淆文における漢字表記文の文体的性格を明らかにするとともに、漢字表記文と漢字仮名交じり表記文とが共存することによるそれぞれの文体の検討を試みるものである。例えば、真名本の一つである『大塔物語』には末尾部分に漢字片仮名交じり文が見られる。しかしながら、従来は『大塔物語』は真名本、つまり漢字表記文であると捉えられ、漢字文と漢字仮名交じり文とが混在しているという実態としての表記体混淆現象については捨象されてきたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は二つあり、その一つは表記体の混淆現象が文体に及ぼす影響を解明することにある。従来は、語の位相として漢文訓読資料に特徴的に使用される漢文訓読語と、和文資料に特徴的に使用される和文語とが想定され、その混淆現象として和漢混淆文を捉えてきた。また、文体として漢文訓読語を基調とする漢文訓読体と和文語を基調とする和文体との混淆現象としても捉えられ、語レベル或いは文レベルでの和漢混淆文研究がなされ、多くの研究成果が公表されている。その一方で、表記体レベルでの混淆現象については管見の限りでは研究の成果に乏しく、また表記体の混淆現象がそれぞれの表記体の文体にどのような影響を及ぼしているのかについての纏まった研究成果は見られない。まずは、このような日本語学的な課題を解決しようとする部分に本研究の学術的独自性・創造性があると認識している。

3. 研究の方法

本研究は、表記体混淆文の本文データ作成、その本文データに基づく表記体混淆文における漢字表記部分の用字についての研究及び漢字片仮名交じり表記文部分における片仮名表記についての研究という方法を採用した。表記体混淆文の資料として、国立公文書館に所蔵されている『聖徳太子伝宝物集』及び光久寺本(慶應義塾大学附属斯道文庫編『斯道文庫古典叢刊之六中世聖徳太子伝集成 第五巻宝物集・拾遺抄・万徳寺本』(2005年4月)の本文データを作成した。作成に際しては、本研究では漢字表記部分をどのように訓読するか、ということを考えてきたために、本文データに訓点は入力していない。分けて考える理由は、漢字表記部分を変体漢文又はそれに準ずるもの(例えば真名本など)として捉えようとしたためである。国立公文書館所蔵本は第一巻から第一二巻(第三巻欠、第九巻を本末に分ける)が現存しており、光久寺本は巻第四巻の本末が現存している。光久寺本の第四巻は、国立公文書館所蔵本の第九巻と対応しており、本文の比較をすることができた。

4. 研究成果

(1) 表記体混淆文のテキストデータ作成

国立公文書館所蔵(内閣文庫)本および光久寺本(慶應義塾大学附属斯道文庫編『斯道文庫古典叢刊之六中世聖徳太子伝集成 第五巻宝物集・拾遺抄・万徳寺本』(2005年4月)の本文データを作成した。

内閣文庫本については、researchmapの資料公開ページに「国立公文書館所蔵『聖徳太子伝宝物集』本文データ」として掲載した。

(https://researchmap.jp/k_hashimura/?lang=ja)

(2) 表記体混淆文の概念規程と研究の意義の明確化

真名本の一つとされる資料に『大塔物語』がある。真名本とは、「同じ書名でほぼ同一の本について、仮名だけ、もしくは仮名交じりで書かれた「仮名本」に対して、漢字だけを用いて書かれた本を相対的に言う。」とされる。確かに、真名本である『大塔物語』の冒頭部分は仮名点、返り点などが付された漢字表記となっている。『大塔物語』はこのように全編にわたって漢字表記であるが、末尾には一部に漢字仮名交じり表記がみえる。つまり、実態としては、漢字表記文と漢字片仮名交じり表記文とが混在しているのである。このような混淆現象を資料として、内閣文庫蔵『聖徳太子伝宝物集』がある。

この資料にみられる文章中における文の表記体混淆現象をどのように分析すればよいのか、

ということについては他の資料と比較する外的な視点と資料内を比較する内的な視点とが想定できる。

外的な視点とは、表記体混淆文を用字法の視点で捉えた場合、漢字仮名交じり表記文の用字と漢字表記文の用字法とを一旦区別して分析することとなる。そして、表記体混淆文における漢字仮名交じり表記文あるいは漢字表記文が、表記体として統一性のある他の漢字仮名交じり表記文あるいは漢字表記文と比較した場合、用字法の上でどのような関係があるのかを検討することとなる。これは、他の文献と比較をするという外的な視点による分析である。

内的な視点とは、表記体が混淆するということが用字法上どのような影響を与えるのかということ、つまり表記体混淆文における漢字表記文における用字法と漢字仮名交じり表記文における用字法とを検討するという分析である。このような漢字表記文の特質を踏まえた上で表記体混淆文における漢字表記文の特質を検討し、更に内的な視点によって文レベルでの表記体の混淆現象が漢字表記文或いは漢字仮名交じり表記文の用字法にどのように関わっているのかを検討してゆくことになろうかと考える。

(3) 表記体混淆文における用字の特質

『聖徳太子伝宝物集』には、「既」字を「スデニ」と読む用例とともに、片仮名「カクテ」を付している例がみられる。しかし、「既」字は同時代の古辞書においては「スデニ」のみに結びついており、「カクテ」との関係を見いだすことが出来ない。また、「カクテ」の用字としては、院政鎌倉期以前では「是」「此」と結びついており、「既」を用いる例は見あたらない

「スデニ」と「カクテ」とは、『日葡辞書』の語義の記述にしたがえば、重なりは認められない。ただ、「カクテ」が指示詞「カク」の語義から接続詞「カクテ」の「このようにして」などといった経緯を示す語として用いられているならば、前件が時制的に成立している状況を示す「スデニ」との関わりはあるようにも捉えられる。「カクテ」が接続詞として漠然と前件を受ける用法が確立しているとすれば、「スデニ」とのわずかな関わりを見いだすことができる。このような関わりを通じて、「カクテ」に「既」字が宛字的に用いられたものと考えられる。このことは、『聖徳太子伝宝物集』の付訓においても意識されており、「カクテ」と読む「既」字の全五例中、四例が全訓付訓である一方で、「スデニ」と読む「既」字に全訓付訓がみられず部分訓「ニ」のみであることから、「既」字の標準的な訓が「スデニ」であることが窺えよう。

このことから、「スデニ」と比較して「カクテ」は辞書に掲載されないため、漢字と訓との関係が曖昧になり、当座の用字となっているのではないかと考えられる。この背景にあることとして、副詞+接続助詞として用いられている状況では、「カク」は「是」「此」などとむすびついていった。一方、接続語「カクテ」は中古から認められるものの、主に和文で使用されるために漢字と結びつくことがなかったが、接続詞として用いられる中世以降、単独の語としての用字が必要となり、その結果意味との関係で用いられたのではないかと考える。

(4) 表記体混淆文の漢字片仮名交じり表記部分の片仮名表記の特質

内閣文庫に所蔵される『聖徳太子伝宝物集』は、天正一四(1586)年の書写奥書を持つ漢字片仮名交じり文の資料である。但し、訓点付きの漢字文と、漢字と片仮名大書小書による漢字片仮名交じり部分とを混在させる文章となっている。

そこで、『聖徳太子伝宝物集』の表記体混淆文における漢字片仮名交じり表記文の特質について検討をするために、既に院政鎌倉期の漢字片仮名交じり文において言及されている小書と大書との切り替えをとりあげ、中世の表記体混淆文における切り替えの在り方が先の時代の同表記の資料と比較検討をした。まず、『聖徳太子伝宝物集』の諸本である内閣文庫本とほぼ同文である光久寺本とを比較した。光久寺本は四巻本・四巻末のみ現存しており、その本文は内閣文庫本の九巻本・九巻末に対応している。

その結果、まず同内容の本文であっても、漢字文と漢字仮名交じり文を一つの文章に混淆させる、表記体混淆文における片仮名の小書大書の切り替えの意義は共通にみいだせるということが分かった。次に、片仮名表記「ベシ」「ナリ」が漢字表記の「可」「也」に対応するということが漢字に準ずる形で大書されるということは想定されるが、真名本などの特殊な資料を除いて漢字表記との対応関係が希薄である「ケリ」についても大書されるということは、漢字との対応関係を背後に持たない単語意識が働いているものと考えられる。

そして、院政鎌倉期の資料を対象として既に指摘されていることと比較すると、少なくとも大小の切り替えという点に限っては、漢字片仮名交じり表記文としての違いは見られず、表記体混淆文においては混淆現象の影響を表記上受けていないということが分かった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 3号
2. 論文標題 和化漢文と日本語書記 『探要法花験記』における文末助字「也」のテキスト機能に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究：日本語・日本文化国際討論会論文集	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村勝明	4. 巻 250
2. 論文標題 中世真名軍記における助動詞「ケリ」の用字について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学攷	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋村勝明	4. 巻 66
2. 論文標題 中世における表記体混淆文について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文教国文学	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 13集
2. 論文標題 『注好選』における左右両訓と和化漢文の用字 説話資料書記の特徴について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個性	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 101巻3号
2. 論文標題 「和化」をどう捉えるか 『注好選』に見る出典資料からの変容	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 38-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋村勝明	4. 巻 68
2. 論文標題 『聖徳太子伝宝物集』における片仮名表記について 小書から大書への切り替えに注目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文教国文学	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 『注好選』孝子説話に見る漢文和化の方向性
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 和化漢文と日本語書記 『探要法花験記』における文末助字「也」の機能に着目して
3. 学会等名 第5回 日本語・日本文化国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 講演：「言語」の文化をつくる場＝授業～「言葉がもつ価値」の可能性～
3. 学会等名 令和3年度新潟県高等学校教育研究会国語部会全県協議会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 『今昔物語集』表題考 なぜ漢文で書くのか
3. 学会等名 令和五年度新潟県ことばの会研究集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 説話表題の文体 日本語書記史における位置
3. 学会等名 新潟大学言語研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 橋村 勝明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 400
3. 書名 中世真名軍記の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	磯貝 淳一 (Isogai Jyunichi) (40390257)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関